

319) ゴロに^{ささ}捧^{うた}げる詩

短い夏の3カ月間 僕たちいつも一緒だったね
山へ行くにも海へ行くにも 僕たちいつも一緒だったね
君は仔猫で僕は人間 なにも言葉は通じなくても
僕たちいつも信頼し合い かけがえのない^{ともだち}親友だったね

君はいつでも僕の後ろを 迷うことなく着いてきたから
僕たちいつも親子みたいに あちらこちらをドライブしたね
それが初めて僕の都合で 離れ離れに過ごしたあの日
君が還らぬ旅に出るとは なぜ人生は悲しいのだろう

今でも僕は信じられない 君と出逢った^{げし}夏至の午後から
秋分の日に出るまで 1年間の4分の1
それが君との時間だなんて 話が少しできすぎている
君はいかにも神様みたいで いったい何の^{けしん}化身なんだろう

疲れ果ててた僕の心を 慰めるため地上に下りた
君は優しい天使なんだね 約束された^{みつき}3月が過ぎて
もとの星へと還っていった 君は宇宙の^{いせいじん}異星人だね
君に出逢会えて倖せだった またいつの日か君に会いたい